今後の研究集会に望む

特集・医学図書館員教育と地区活動

朴 木 貞 子*

今年から3年計画で研究集会(講習会)が行われます。総会決議によれば、医学図書館員のための研究集会であること、二地区にふさわしい講習会であること以外に全く条件がついていません。自由で意義深い企画を期待し昨年までの経験がよりよく活用される様念じます。

企画はより多くの意見、資料をもとに組み立てられるべきで、でき上った企画は最少限の人達の手で機能的に処理され、企画の評価は会の出席者と企画者から適確になされなければなりません。企画の基礎資料・意見は次の目的に合せて集めるべきです。

- 1) 館員は何を考え、何を望んでいるか
- 2) 目的は何か
- 3) どの館員を教育すべきか(熟練度)
- 4) 何を教育すべきか(教科目)
- 5) どの方法で教育すべきか(集会の様式)

目的の曖昧なもの、多目的なものは、常に曖昧な結果しかもたらさないことを銘記すべきです。今後3カ年の集会は地位の順、年の順という順々の物見遊山のな行事でなく機能的で合目的でありたいものです。

館員は何を考え何を望んでいるか

企画を観念的に割りきらない為に、医学図書館に働く館員が何を考え、何を望んでいるかという勤労意欲調査を基に企画者が討議することを望みます。これは産業界ではすでに種々の成果を挙げている方法ですが、館員の適性・興味の対象を感覚的にではなく科学的

に把握する為の良い資料となりましょう。働く人々の理解・分析がなくては職場の合理化向上は望めません。ここでは“アンケートにみる図書館員の労働者意識”¹⁾のごく一部を参考にします。これは113名の公共及び大学図書館員のアンケートをまとめたものです。

質問：現在の仕事について

深い意義を感じ積極的に働きたい	36%
自分の性格・能力に合っている	29%
一生の仕事とは考えていない	17%

適性を認め、積極的に意欲をもやしている人が65%もいます。一生の仕事とは考えない17%の逆の数が生涯の仕事だと考えているならば、図書館にとって狂喜すべきことです。日本の図書館界も万々歳です。いずれにしても図書館が前向きに前進できる可能性が人の点で十分備っていることは否定できません。

質問：働きやすい図書館として最も大切な条件は何か

館の運営が十分な話し合いで行われる	40%
予算が十分あり設備が整っていること	31%
有能な職員が十分確保されていること	17%
全職員の相談より優秀な個人の創意や情熱が尊重されること	9%
わからない	3%

質的な意味での人的資源よりも話し合いと予算が必要条件だということです。質足れりとする館員が適性を認め、意欲である場合、話し合いという運営参加の道がとぎされたならば欲求不満に落ち入るのも無理からぬことです。自発的な発表意欲と研究の態度を阻害し

* Sadako HONOKI, 北野病院図書館

ないことが、館員の為であり館の発展に役立つ結果になります。此度の企画には、有能で意欲的な、しかも適性を認める館員をどの様に訓練すべきかを主題に目的をしぼって、効果的な企画を考えていただきたいものです。関西での経験で医学概論等の講義式のものより、Reference work の実習の方が好評だったのは、出席者の意欲的な面がほど良く満足されたからと考えられます。しかし、これ迄の講習会の最大の欠陥は出席者構成です。第8回を例にとりましょう。経験年数は平均5年8カ月、1年未満が17.4%。学歴は大学卒50.9%、高卒32.7%、旧制女学校5%、中卒1名、これらの人達が医学系、薬学系入り混っています。此の構成員の総てに満足される講義が存在するものでしょうか。各回の座談会でも言われている様に過不足が表われるのが当然です。構成員をMassとして扱った概論よりも、各個人の力が発揮できる実習が好評であり、各個人の力が歴然とする方法よりgroup制という補い合えるやり方の方がより好評で効果的でした。group制が一応成功したのは、熟練度の違う人達を学歴・経験年数等で適当に配分し、熟練の度合を互いに補い得たため、assistantの目の届かない部分をgroupの熟練者が補った結果となりました。たしかに、未熟練者にとっては効果的でしたが、熟練者にはteamwork以外にどのような効果があったらうかと疑わざるを得ません。

どの館員を教育すべきか

職員の重みは、経験年数と学歴とに大きく左右されます。職員は何らかの形で教育され訓練されるべきです。唯協会が主催して行う研究会で訓練を受けるべき館員は誰れかという場合にはその目的に合せて焦点を絞るべきです。各館には有資格者と無資格者がいます。1965年度の加盟館統計²⁾によれば一館平

均10.5名の職員の内有資格者5.5名、無資格者5名です。有資格者の比率はかなり高いので、アンケートにも表われている様に館員の質的余力はまだ残されています。研究会の目的は、この質的余力を刺激することにあります。無資格者への教育は各教育機関が当るべきで、館単位で検討すべき問題です。単に無資格者の刺激ならば担当の司書が当るべきで、近接の図書館を見学するという簡単な手段でも効果があります。

次に問題になるのは3年未満の司書の教育です。司書は必ず理論的な教育をどこかの機関で受けています。その司書に実地訓練をしてその館に適した職員が創られます。この間の教育はその館以外にする処がありません。3年と言う数は、その館に適した訓練を受ける時間です。その間、館員は作業を身につけると同時に館の評価をも含めて問題点を掴めるようになります。館としても同時にその館員に対する可能性、適性を評価できるようになります。

訓練すべき職員か否かはこの時に始めて、はっきりします。こうして選ばれた職員こそ、他流試合が可能であり、trainingに耐えられ、trainingの価値ある司書と言えます。有資格者無資格者を問わず、教育をすべて他人まかせにしたのでは決して“館に必要な良い人”は生まれません。中級者層を加盟館全体が協力して立派にtrainingし、その人達に無資格者、初心者への指導をまかせるべきでしょう。年数から言っても無気力になりがちな中級者に十分テコ入れをすることは館に背骨を入れると同等の効果があると考えます。

何を教育すべきか(教科目)

大まかに分けてみます。

- 1) 既存の知識解説：医学概論，書誌，図書館学・実務
- 2) 新知識解説：医学会 News, Topics. 新

しい tools, 器具

図書館実務に関する新しい方法, 新しい文献

3) 実務の Training

1 既存の知識解説

医学概論と書誌は例年の如く批判の対象となっています。第9回には歴史と展望, 第10回には書誌を中心に短時間でと教務の方針を出してみました, 決して好評とは言えませんでした。1~2時間で概説することの不可能さを察した方は Topic を話術で聴かせて好評を得た様にも思われます。概論が実務の基礎として痛感されない点に問題があります。これは概論の内容が貧困な為ではなく, 概論の必要性を効果的に生かしえなかったと解すべきです。試みに概論中心の教課の組み方を考えてみましょう。概論は歴史と展望を主流として豊富に Term を使ってもらいます。実習時に概論中の主題を活用した文献, 検索, 書誌作成, Terminology を中心とした考察, 分類表中の位置, 件名索引の位置, という様に, とすると聞き流しやい概論を角度を変えて何度も考える方法をとります。

図書館学や実務に付する概説を中級者にする必要はありません。唯この種のものは新しさを解説する際の基礎として活用すべきです。

すでに気づかれた通り, 科目と科目を関連させる役目は教務担当者にあります。教務が全権をもって全講師に指示を下さなければ科目と科目とが切断されます。教務が従的な立場で講師に“全面的にお願いする”のではなく, 課題を明瞭に示し, 全体の位置づけを説明しなければなりません。教務担当者が教務に対する全権をゆだねられることが必須の条件となります。

2 新知識解説

その点新しい知識は誰もが興味を持ちます。特に最近一カ年の News, Topics, 図書館学的新知識, New Journals の書誌的分析・評価はどの年にも必ず加えて, 新しい考え方, 方法をしっかりとこなして帰館してほしいものです。図書館関係の論文は国内だけでも

数十あり, 世界では Library literature にみられる様に数限りもなく紹介されています。中級者が興味を持つ論題が誰れかの手で必ず論じられているとみてよいでしょう。医学図書館は日本では希にみる提携体ですが, 図書館学又は実務上での研究的な提携はやや希薄と言わなければなりません。中級者の質を更に深める方向に尽力すべきでしょう。具体的に申しますと, 例えば最近一カ年間に出版された図書館実務の合理化に関する主要論文を解説する, 新しい tools を解説する, それらに対する討論をするのも有効かと思われます。

3 実務の training

過去3年来 Reference の実習は好評でした。しかし, そで果した役割は, 初心者への手ほどきでした。Reference の重要さと一応やればできる可能性と, 日常目にふれる資料に当る機会を与えるという Demonstration に過ぎません。ここで中級者以上を対象とすれば事情は一変します。Reference tools を使えることが条件であり, 問題をかかえていることが条件になります。中級者相互の研究や連繋は, 館相互間の提携を更に密にするでしょう。

同じことは分類や目録にも言えます。図書館という土壌は各自のペースが保護されやすいところ。館の特殊事情という被護の下にともすると甘えがちになる傾向を防ぐのはやはり研究集会でしょう。独自であればある程比較, 批判, 問題把握が正確でなければなりません。

図書館業務はすべて適確に速く処理すること。そしてそのすべてが利用者へのよりよい Service に繋がっています。とすれば方法論, 実技 Contest, 作業量調査, Cost 調査, 作業手順の実地比較という共同研究の主題が出てきます。共同研究で modify されたことは個人研究より更に効果的であることは言うまでもありません。

どの方法によるべきか (集会の様式)

集会は効果的な様式でなされなければなりません。考えられる方法としては³⁾, 自主的

な共同研究を意図する研究集會、教養、専門知識、技術を受動的に聴講する講習會、指導者の下に相互批判をしながら研究を高めるセミナー、研究発表を主軸とする研究発表會が考えられます。これらを組み合わせて退屈しない時間割を組むべきです。集會の様式と前後して問題になるのが費用です。総会決議にも費用については一言もふれていません。費用は協会の援助と会費とで賄い、館長や主任司書が資金集めに奔走することはやめてほしいものです。今回は医学図書館のみの会でもあり、費用がかさむなら、賛助会費的な意味で会費の大巾値上げ、協会の全面的資金援助を躊躇すべきでないと考えます。過去3カ年の会計報告を比較しましょう。

	第8回	第9回	第10回
	円	円	円
収入 協会補助	20,000	30,000	40,000
協賛金	103,000	90,000	103,000
会費他	90,000	86,000	139,000
計	213,000	206,000	282,000
支出 印刷	92,000	67,000	121,000
講師謝礼	100,000	118,000	113,000
通信	18,000	3,000	14,000
事務局費他	49,000	43,000	23,000
計	259,000	231,000	271,000

いずれも出席者は50~60名でした。一日実講習時間6時間で6日間、都合36時間で約25万円1時間約8千円という計算になります。これ迄の会で無駄をしていたとは考えられません。講師を遠方から呼べば費用は非常にかさみますが、いずれも遠方から呼んだ講師は1~2名に過ぎません。唯、印刷物がかなり豊富に配布されたと言えましょう。会費だけでは印刷費しか賄えない。これは注目すべきことです。一応1時間8千円の費用がかかるものとして企画すべきでしょう。蛇足ながら会の様式と出費項目を羅列してみよう(いずれも資料代は別)。

研究集會形式: Consultant 又は司会者謝礼
研究調査費

講習會形式: 各講師謝礼

研究発表會形式: 調査研究費又は研究助成金

Seminar 形式: 講師謝礼 調査研究費

企画者はこれらを組み合わせて費用の節約を計ることもできます。調査研究費は出席者側の館負担とし、会場での費用のみを会が負担することも考えられます。ここで提案したいことは、無料奉仕の上に立つ経費節減を止めることです。多少の出費をすることで質的に高いものを求める方が本来の目的に合致します。

予算的な苦勞を特定館に負わせない為に、補助金、協賛金は一切事務局を中心に中央で賄い、その他は、西日本東日本の全館が、出席者数如何を問わず会費として分割負担の義務を負い、中級者のテコ入れに日本中の医学図書館が結束すべきではないでしょうか。経済的な裏付けが確保されなければ、中級者という制限は困難になります。会費を払ってくれる人は誰れでも可となり、いきおい多目的たらざるを得なくなり、曖昧な結果に終らざるを得なくなります。ここで私はかなり強く中級者に限定することを主張してきました。初級者、3年未満の司書、病院図書室の実務者を振り切りがたしとするむきもあろうかと思えます。機関又は本人が希望し、会費の義務を果たすならば聴講生として認め、彼等に対する教育効果の責任を一切負わない形であってほしいと思います。

最後に講師及び企画者の人選には、実質本位の立場で、これ迄の研究、活躍を十分考慮した上で決めて頂きたい。特に企画者中の教務員には地区最良の staff を4~5名当て、全責任を負わせて存分に力量を発揮できる様企画される様望みます。

<参考資料>

- 1) 図書館雑誌, 60: 54, 1966 参納哲郎
- 2) 第36次日本医学図書館協会加盟統計
- 3) 図書館ハンドブック 1960年146~148p.
第36回日本医学図書館協会総会議事録
第8回講習の問題点と今後への期待
医学図書館 10: 149~55, 1963
医薬学領域の Information Specialist をめざして, 医学図書館 11: 277~87, 1964